

吉武輝子

夫と妻の定年人生学



夫と妻の定年人生学

吉武輝子



吉武輝子（よしたけ　てるこ）

1931年、兵庫県生まれ。1954年、慶応大学仏文科卒・同年4月、東映宣伝部入社。1961年、日本初の宣伝プロデューサーとなる。1963年、長女あずさ出産。1966年、東映退社・文筆生活に入る。主な著書『女が自分と向きあうとき』『やさしく紡ぐ女の年輪』『素敵に女の老い』『わたしの姑支度』（海竜社）、『女人吉屋信子』（文藝春秋）、『愛すれど孤独』『愛のうしろ姿』（PHP）、『のびのび子育て12章』（日本書籍）、『娘の言い分・親の言い分』（国土社）、『愛と誇りと』『危機の家庭』（未来社）その他。

夫と妻の定年人生学

定価一、一〇〇円

著　者　吉武輝子

昭和六十二年十月三十一日　第一刷発行

昭和六十三年一月　八日　第二刷発行

発行者　下村のぶ子

発行所　株式会社　海竜社

東京都中央区築地二―九―二　郵便番号一〇四

電話（〇三）五四二―九六七―　振替東京一―四四八八六

印刷所　白陽舎印刷株式会社（五）

製本所　大口製本印刷株式会社

©1987, Teruko Yoshitake, Printed in Japan

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします

目次

第1章

男の人生から肩書きが消える日

男の名刺から肩書きが消える日 ————— 6

空っぽ症候群の夫と妻の地獄 ————— 20

職業的人格にハイジャックされた男たち ————— 34

第2章

互いに手を延べあって夫と妻の八十年型人生時代

夫の肩書きの下で生きた妻の誤算 ————— 46

役割では生きられない八十年型人生 ————— 55

互いに手を差し延べあう夫と妻の生き甲斐 ————— 63

第3章

夫だけが経済を担う人生の不幸

経済の担い手は二人三脚で——76

転職は人生の軌道修正——82

終身雇用よさらば、第二の転業時代——88

第4章

夫と妻の豊かなシリーズ型職業生活時代

第二職業生活は人生優先型で——100

手づくりケーキの店ではじまった新しい人生——106

競輪選手から陶芸作家に転進した夫と妻の道程——112

第二職業時代を成功させる鍵——122

第5章

職場人間から個人に帰る日

職場の上下関係を個人生活に持ち込む悲哀——132

なぜ個人と個人のおつき合いができない？——141

男が自分を取り戻すとき——148

第6章

ひとり旅で発見した第二の人生

自己発見のひとり旅に出た夫——160

あるがままの自分を受け入れる——169

第二の職業人生に出発^{たびだ}った夫——178

第7章

わかち合う暮らし、助け合うおかえしの時代
生活感覚が未成熟な夫たち——188

暮らしの「新参者」に愛をこめて——199

定年後の人生はおかえしの時代——209

あとがき——221

装丁——智内兄助

第1章

男の人生から肩書きが消える日

男の名刺から肩書きが消える日

その名は定年通り、不機嫌通り

杉並区の下高井戸に住みついて、今年で二十四年目になる。娘のあずさが生まれた直後に、結婚以来、十二年間住み慣れた四谷荒木町の僅か四坪半という小屋状の家——といっても土地の方は五十坪近くあったのだが——を、当時、地下鉄丸の内線が完成した直後で地価が高騰したのを機に売りはらい、新興サラリーマン住宅地として、猫のひたいほどの庭つきの建売住宅が目白押しに建ち並んでいた、その一角に居を定めたため、娘の年齢と居住年数がピッタシ一致しているので、数字に弱いわたくしも、これだけは間違いようがない。

わたくしの家の前の通りは、袋小路になっている。私道をはさんで、両サイドに八軒ずつ家が建ち並んでいて、わが家は、向かって左側、手前から三軒目にあたるのだが、いつの頃からか、娘はこの袋小路の通りを“定年通り”、またの名を“不機嫌通り”とひそかに呼びならわすようになった。

言われてみればその通りで、わたくしたち夫妻が、人生最大の買物である建売住宅を、まさに清水の舞台から飛び降りるような思いで買い求めたときは、どちらも、まだ三十代半ばには達していない壮年期の真っ只中の人間だった。転勤のために売りに出された築五年目の家を買ったわたくしたち夫妻が一番年が若かったのではなからうか。すこし人生の先輩であった、先住者たちは、大方が、三十代半ばで二十五年払いという長期の住宅ローンを借りて家を買ひ、サラリーマン家庭特有の律義さで、毎月せつせと返済にはげみ、すべて払い終わった時点で、これまた、大方の夫族が定年を迎えていたのである。

“定年通り”とは言いえて妙であった。そして“不機嫌通り”は妙すぎて、時にはほろ苦く感じられさえたものである。

かつては、この袋小路通りに、日中、見かけるのは文字通り、女子どもの姿ばかりだった。地域の全日制住人である女たち——妻たちは、たとえ共働きの妻であっても、顔を合わせれば、一番無難な話題である天候について“寒いの”“暑いの”とコチヨ、コチヨ、ことばを交わし合ったり、時には、子どもの進学問題で話しこんだり、ご近所のよしみで不祝儀の席に相集まつてつらなったり、気の合う人、合わぬ人があるにはいても、それに、ご近所づき合いが、愛想よくスムーズに行われていたのだった。

夫族とはほとんど顔を合わせることはなかった。夜討ち朝がけが習性となっているマス

コミ人間のわが夫がその代表格ではあったが、袋小路通りの夫族は、おしなべて典型的な働き蜂で、時折り、出勤する姿を、二階にある物干台から洗濯物を竿に通したり、ロープに洗濯ばさみではさみながら見下ろすぐらいのことで、頭のかたちやばい具合はわかっていても、まともに顔を見る機会にはめぐまれなかったため、たとえ、大通りで顔を合わせることがあったとしても、向こうはもちろんのこと、こちらもそれと気づかず、通りすぎりの人間のごとくすれ違っていたのかも知れない。

ともかく、長年にわたって、袋小路通りは女同士の気安さにみちみちていたのである。

しかし、壮年期と老年期のはざかい期を生きる、定年退職組の夫族の姿が、日中、見られるようになったこの四、五年來というもの、逃げ場のないこの袋小路通りが、妻たちには、なんとも気ぶっせいなものと思われはじめたのである。

鼻うたまじりに足どりも軽く大通りを折れて袋小路通りに入ったとたん、奥の方から、何故か道の真ん中を、まるで不機嫌が背広を着たようなムツとした表情で歩いてくる、よそさまの夫の姿が目に入ると、なんとなくつけもの石が頭にのっかっているような気分になり、瞬間的に踵をかえしたくなってしまう。それではあまりにも失礼とわが身に言い聞かせ、向こうが真ん中を歩いてくるので、いたしかたなく道の片側に身を寄せ、すれ違ひざま、ご近所のよしみで、“お暑うございますねえ”とか、“お寒うございますねえ”とか、

挨拶らしきことをかけてはみるのだが、ただの一度も愛想のいい返事が返ってきたためがない。不思議なことに、夫が定年を迎えたたん、妻たちの表情も、不機嫌とまではいかないが、なんとなく、うつそうたる気配がただよっているのが見てとれる。

まだ、人生のとは口にしたばかりの娘のあずさにとっては、こうした袋小路通りの住人たちの日常生活の微妙な変化は、ジョークのネタにしかすぎなかったのだろうが、夫の定年がきわめて現実的な問題として身にせまっているわたくしにとっては、この変化を笑い話ですますわけにはいかなかったのである。

「の」の字が消えた男の非力

もともと、夫の定年問題は、二十代の頃から、わたくしにとっては、人生最大の関心事であった。関心事というよりは、おびえなしでは考えられぬ重大事であったといえる。

銀行員であったわたくしの父親が自らの手で生命を絶ったのは、定年退職後一年目のこと。そのとき、わたくしは娘と同世代の二十四歳だった。父が自殺をしてから、すでに三十二年の歳月が流れ、父の死を傷むあまり泣くことさえできなかった二十四歳の娘が、今は父と同じ年齢に達してしまっている。それなのに、父の自殺の記憶は薄れるどころか、むしろ年を経るごとに、ますます、鮮明さをまし、昨日の出来事であったかのようになま

なましく思い出されてならないのである。

明治生まれの父は、家庭は妻にまかせ、男は身軽になって仕事一筋に生きるもの、職業人としての成功は即、男の成功というこの方程式を疑いのないものとして受け入れ、実にキマジメに実行しつづけた人であった。大学を卒業してすぐさま入行して以来、五十五歳で定年退職を迎えるその日まで、父は「三菱銀行の」という「の」字つきの名刺だけを使って生きてきた。個人はきわめて非力な存在である。しかし、どこそこのなんのなにがしという「の」の字が、個人に冠せられたときは、個人の非力さを凌駕する力を持つようになるのが、男の世界の習いである。三十年余にわたって、「の」の字の威力を発揮する名刺を使って生きていけば、いつしか、非力な個人としての己の能力、才能と、「の」の字の威力を混同するようになったとしても不思議ではないだろう。

ましてや、父の勤務していた銀行は、貸すものの威力をもついれものである。その上にトントン拍子で出世街道をつっぱしっていた父は、早くから、支店長という肩書きを名刺に刷り込むことのできる立場にあった。支店長は、貸すか貸さぬかを決めることが可能な威力あるポストである。貸すものの威力をもついれものの「の」の字と、貸すか貸さぬかを決める力を持ついまひとつの「の」の字と、二つの「の」の字を刷り込んだ名刺だけを使いつづけているうちに、父も当然のことながら、非力な個人としての己の能力や才能と、

二つの“の”の字の威力を混同するようになっていったらうことは容易に想像がつく。

多分、銀行からお金借りられなければ、店や会社がたちゆかぬ、ギリギリのところまで追いこまれていた人たちであつたのだらう、そうした人たちの多くは、銀行が融資をさけたがる零細企業の経営者であつたようだが、一縷の望みをたくして、わたくしの家にまで、足をはこび、玄関先で傲然とも見えるほどに立ちはだかる父の前で、七重の膝を八重に折らんばかりにして、融資を頼みこんでいる姿をいくたびか、細目にあげた襖ごしに垣間見たことがある。

時には、男泣きに泣きながら、玄関のたたきに土下座する姿を見たことがあつた。銀行といういれものの中でも、父は、どれだけ多くの人たちに、頭を下げられていたことだらうか。だが、なんとしても銀行からの融資を仰がねばならぬ立場にある人たちが下げる頭は、銀行という貸すものの威力をもったいれものと、それを決裁する力を持つ支店長というポストにたいしてであつたはずなのに、己の能力、才能と二つの“の”の字の威力とを完全に混同しきってしまった父は、あたかも自分という個人に向かって下げられた頭のごとく錯覚してしまっていたに違いない。

こうした錯覚のもとに、個人が個人にのしかかれば、のしかかられた個人は手ひどく心が傷つけられる。「いまに見ている、“の”の字をとっばらって、あたりまえの人間として

お互いに向きあうときがきたら、どっちが人間としての格が上か、そのときに、きっちり決着をつけようではないか——借りる立場にある多くの人たちにそうした無念な思いを抱かせた分だけ、“の”の字がとつばらわれた時にしつべ返しをくうというのも、これ又、男の世界のならわしである。

半減した年賀状の語るもの

父も定年退職を迎えたとなん、痛烈なしつべ返しをくうことになってしまったのだった。すでにジワジワと寿命がのびはじめていたときだけに、戦前のよき時代のように、定年退職後は、残りすくない人生を植木いじりをしながら、ゆうゆうと隠居生活を送るというわけにもいかず、父は銀行を定年退職した後、伊奈製陶の天下り重役に就任していたのである。第二の職業時代としては最高のスタートではあったが、どんなに最高のスタートとはいえ、第一の職業時代よりも第二の職業時代の方が、社会的ステータスも稼ぎも落ちるというのがサラリーマンの宿命といていいだろう。

貸す側から借りる側に身を移したとなん、錯覚を起こして個人が個人にのしかかった分だけ、盛大にツケを父は支払わせられることになったのである。まず盆暮れのつけ届けがガクンと減ってしまった。支店長時代は、四畳半の納戸に入りきれぬほど、盆暮れの届け

ものがあつたのだが、別にそれは、父の人徳によるものではなかっただけに、その分は、次なる支店長の名前にさつきときりかえられてしまうこととなつたのだろう。

ついで年賀状が半減してしまつた。両親は共に東京生まれの東京育ちであつたが在行中は、転勤につぐ転勤で、四人の子どもたちの出生地も姉が東京、わたくしが兵庫、妹が大阪、弟が名古屋と四人四様という仕儀となつてしまつていた。多分、父は、いずれは東京に戻るつもりではいたのだろう。しかし、名古屋支店の支店長をもつて定年退職を迎えたのちも、銀行の意向を受けて、当時、かなりの額を融資していた伊奈製陶に天下り重役として就任したため、結局は転任先の名古屋が永住の地となつてしまつたのである。

父にとっては終の住処となつた名古屋の家は、一見、料亭ではないかと思えるほど広壮な、ぜいをつくした日本家屋で、東山公園を間近にひかえた、かなり小高い山の中腹に建てられていた。眺めはよかったが、駅から十分ほど、急な坂道をのぼらねばならぬのがきつかった。在行中は、膨大な年賀状で、どれだけ、郵便配達の人たちに苦勞をかけたことだろう。

「お宅のおかげで、二度、急な坂道をのぼらなければならぬ」と、定年間近と見える、初老の郵便配達人が、息をはずませながら嘆くのを耳にしたことがあつた。

父は、一通り目を通した年賀状を、高さ三十センチほどの山にして、十ぐらゐにわけ、

客間の床の間に並べるのが例年の習慣となっていた。客間に通された年賀の客は、床の間に並べられた年賀状の山に視線を向けると、誰の目にも、一瞬、その量の多さに感嘆の色が浮かぶ。年賀の客のこの一瞬のまなざしが、父の自尊心を心地よくくすぐってくれていたのだろう。

父のステータスシンボルとも言うべきその年賀状がガタ減りしたことを知ったのは、正月休みに実家帰りをしたときのことだった。

当時わたくしは、東映の宣伝部に勤務していたが、すでに四谷荒木町の四坪半の小屋状の家で、夫とままごとのような共同生活を送っていただいたのである。

四人の子どもたちが、結婚や大学進学のために巣立ってしまったあと、名古屋のただっ広い家には両親だけが残されていた。子どもが巣立ってしまえば両親の関係は稀薄になる。共に年を経れば、僕、稼ぐ人、わたし、家を守る人という役割上の関係もやや薄れはじめる。この二つの関係だけを生き、夫妻の関係をなおざりにしてきた両親の間にすき間風が吹き抜けており、ことに、母がひどく寂しがっていることがわかっていたため、正月休みには、できうるかぎり、実家に帰るようつとめていたのだった。

二十四歳という年齢のわたくしは、やっと人生のとは口に立ったばかり。誰かの口から何気なく出たことばの背後に、どれほどの心の痛みや人生の重さがあるかを推察しうるだ